

---

# 恋の痛み

あーゆ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋の痛み

### 【Nコード】

N2053Z

### 【作者名】

あーゆ

### 【あらすじ】

瀬戸口かなは帝丹中学1年生。サッカー部のマネージャー。キャプテンの工藤新一が苦手だったが…

オリキャラ目線の新一と蘭の話です。

その気持ちに気づいたことは幸せだったのだろうか。

気づかないままなら

この胸の痛みを感じることもなく

頬を伝う涙を流すこともなく

日常を送れただろう。

けれど

気づいたからこそ

毎日彼を見つけてドキドキして話しかけられる度に嬉しくて輝いた日々を送ることができた。

先輩、大好きでした。

私、帝丹中学1年の

瀬戸内かなは

サッカー部のマネージャーをしている。

兄貴が小さい頃からサッカーをやっていた関係で

昔からサッカーは大好き！！

兄貴は入れ替わりで卒業しちゃったけど

兄貴を知っている先輩たちは可愛がってくれるしイイ人たちはばかりで  
とつても部は居心地がよかった。

最近、3年生は引退をして2年生にキャプテンを引き継いだ。

キャプテンはあの  
工藤新一先輩。

兄貴から話は聞いていた。

すぐくうまい奴がいるってよく興奮して話してたし。

だからキャプテンになることも不思議じゃなかった。むしろ当然って感じて…

ただ。ただ。

…近寄り難いというか。

クールだからどう話しかけていいのか。

あまり女子と話してるイメージないし。

今までは3年生のマネージャーが色々やってくれてたけど引退してからマネージャーは私1人。(2年生はいないの)

今日から3年生は来ないみたいだし

なんかちよつと不安だなあ…

「瀬戸内!!」

後ろから中道先輩が声をかけてくれた。

「暗いぞ。どうかしたのか?」

「先輩マネージャーが抜けちゃって1人で大丈夫かなって思うと不安で…」

素直に本音を吐き出す。

「大丈夫だって!!俺らもフォローするし、何かあったら工藤に相

談しろよ。あいつ頼りになるぜ?」

「あ…はい…」

まさかその工藤先輩が苦手ですとは口が裂けても言えない

そんなこんな会話をしながら部室に到着。

ううう不安だよう。

ドキドキしながらドアを開ける。

「「あ…」」

中の人物とハモってしまった。

「工藤!! 早いじゃんか」

そう中の人物は工藤先輩だった。

「ちよつとな。」

うう…やっぱり取っ付きにくい…

「あ…私ボールとか用意します」

今まで2人でやってたものを1人でやるんだし  
テキパキ動かなきゃ!!

「中道、瀬戸内を手伝ってやれよ。まだ分からないこととかあるだ  
ろうし」

「あ。そうだな」

「あ！！そんな…大丈夫ですから！！」

先輩の手を煩わせるわけにはいかないと断りをいれた。

「一人立ちして初日なんだから甘えろよ。コキ使っていていいからさ」  
工藤先輩がこちらを見てそう言った。

…意外と優しい？

工藤先輩の意外な一面を見たその日の部活は滞りなく終わった。

「お疲れさまでしたー！！」

ふうー。終わったあ。

ジャージから制服に着替えて伸びをした。  
秋になりかけた季節の風は気持ちいい。

「瀬戸内、お疲れさま」

後ろから声をかけられビックリして振り返ると工藤先輩が立っていた。

「お…お疲れさまでした！！」  
慌てて頭をさげる。

「マネージャーの仕事、一人で大変とは思っけど頑張ってたな。なん

かあったらすぐ言ってくれて構わないから」

工藤先輩が笑顔を見せた。

「ありがとうございます！引退した先輩たち後をしつかり引き継いで頑張ります！！」

私は頭を下げながら早口でまくしたてた。

「…あんま堅くなんなよ。オレそんなに怖いか？」

やばっ。苦手意識がにじみ出たのかな。

わたしは慌てて否定する。

「いや…そういうわけじゃなくて…」

「瀬戸内先輩にはお世話になったからさ。その恩じゃねーけど、何でも力になるからよ。ま、あまり身構えずよろしくな！！」

そう言っつて先輩は右手をふりながら帰っていった。

それを言うためにわざわざ…？

工藤先輩っつて…実は優しいかも。心があつたかくなつた。

翌日、

朝早起きをしてゼリーを作った。もちろんサッカー部員のために。

実はお菓子作りが得意。

部活終わりに部員に振る舞った。

「うん！ーうまい！ー！」

「瀬戸内の意外な才能発見って感じたな」

みんな誉めてくれて大満足！ー

ちらりと工藤先輩を見ると部誌を書いていた。

「あ、工藤先輩。私書きますから良かったらゼリー食べてください」

以前みたいに緊張することなく先輩に話しかけられるようになった。

「さんきゅー！ーいただきます」

その笑顔に少し心が揺れた。

「お疲れさまでしたー」

片付けを終えて先輩たちも引き上げたし、あたしも更衣室へ向かおうとした。

「あの…」

「え？」

「工藤新一って帰っちゃいましたか？」

ロングの黒髪先輩に声をかけられた。

「あ、いえ。まだ部室にいます。呼んできますか？」

「あ、いえ。もう少し待ってみます」

明らかに私が後輩と分かっているにもかかわらず丁寧な受け答えをしてくれるその先輩に優しさを感じた。

「あ、新一!!」

「蘭…どうした？」

お互いを呼び捨てにした2人は相当仲良しなんだなと思いながら先輩たちを見つめる。

「どうしたじゃないわよ!。貸したノート返してよ。それなくちゃ宿題できないじゃない!!」

蘭、と呼ばれた先輩は腰に手をあてて怒りを露にした。

「あ!!、わいい…鞆なかだ…取ってくるから待ってる!!瀬戸内、お疲れさま!!」

「お疲れさまです…」

私のこと、目に入ってたんだ。  
このモヤモヤがなんなのか  
分からないまま帰宅をした。

「え?なんだった？」

家に着くと兄貴がリビングで寛いでいた。

「だから！！工藤先輩と仲がいい”蘭”って先輩。」

「ああ！！毛利さんね！！可愛いだろ？工藤の幼なじみだっさ」

「幼なじみ？彼女じゃないの？」

「彼女じゃねーっさ。空手部なんだぜ？意外だろ」

「へー…」

なんだ。彼女じゃないんだ。

モヤモヤが少し晴れた気がする。

それから一週間

毛利先輩を見かけることはなく  
日にちがたつにつれて

その存在を忘れていった。

「かな　最近部活に熱心だね！！」

親友の沙紀がニヤニヤとしている。

「うん、サッカー好きだもん」

「好きなのはサッカーだけ？」

「どっついう意味よ」

沙紀が隣りに腰かけてこちらに目を向ける。

「最近、部活に熱心だなと思ってさ。かなを見てたんだけど。かな

の視線の先にはある先輩がいつもいるんだよねー」

ドキツとした。

「ね。工藤先輩のこと、好きになっちゃった？」

”工藤先輩” って言葉にまた心臓が跳ねる。

「や…そんなわけないじゃん！！大体、あたし最近まで苦手だったんだから」

「でも最近はずうんでしょ？」

「うん…思ったより優しかったし…」

ふーんと沙紀は頬杖をついてニヤニヤしている。

「ま、頑張りなよ！！ぶ・か・つ」

沙紀は意味深な笑顔で私の背中をたたく。

もう！！昔から沙紀はそうだ。

HRが早く終わったのでいつもより早めに部室に入る。

まだ時間があるし、少し部室を片付けようかな、と掃除用具入れを開けた。

その時、誰かの話し声が外から聞こえた。

「おめー、病み上がりで部活なんて大丈夫か？」

「大丈夫よ！！すっかり完治させたから。それに、今日は試合控えてるから頑張らないと！！」

工藤先輩と毛利先輩の話し声だった。

部室のドアを少し開けて2人を盗み見る。

「ノート、明日でもいい？急ぐようなら急いで写して今日中に返すけど」

「んー…別に急がないけど。今日はおっちゃん家にいんのか？」

「遅くなるって聞いてるけどなんで？」

「母さんも会いたがってるしうちで飯どうかなって。ついでにノートもうちで書いてけば？」

照れ隠しか工藤先輩は毛利先輩から目をそらした。

「嬉しい！！じゃあ帰り待ってるね」

「おお」

毛利先輩は満面の笑みでその場を去る。女の私もトキメクような笑顔だった。

そして工藤先輩は

毛利先輩の後ろ姿を

切な気に

優しく

温かく

見つめていたんだ。

部活中には

絶対に見せない顔。

その顔に

胸を締め付けられて

先輩が動くまで

私も動けなかった。

今

2つの気持ちに気づいてしまった。

私、工藤先輩が好き。

そして

工藤先輩は

：

「今週末、練習試合やるぞ」  
ミーティングで顧問が  
なんの前触れもなく言った。

「会場はうちのグラウンドだから色々と整備しないとな」

先輩たちが続く。

「うちの部は昨年わりと強かったから先輩たちが抜けて弱くなったなんて言われないうちに頑張ろうな!!」

工藤先輩が締めくくり  
部活は終わった。

はあ…

あほらしい。

片想いに気づいた瞬間にやぶれるなんて。

疲れてないのに足取りが重い。

しかも

そんな時に限って

私の前を歩くのは毛利先輩と工藤先輩。

気づかれないように

一定の距離を守り歩く。

「へー。試合かあ。キャプテンになって初だし頑張ってるね」

「おめー 来ねえの？今年一回も来てねえじゃねーか。」

「仕方ないじゃない。大きい試合には行けてるけど練習試合と空手

部の練習、見事に重なってるんだもん」  
毛利先輩の言葉に工藤先輩は少し不貞腐れた。

「サッカー部、何時から？」

「……………13時」

「部活、お昼には終わるから見に行くね」

見なきゃよかった。

胸が苦しい。

でも

一つわかったことがある。

”2人はまだ付き合っていない。工藤先輩の片想いだ”ってこと。

重い足を引きずって帰宅した。

兄貴に何か話しかけられて

適当に返したけど

内容はまったく覚えていない。

翌朝、

また早起きをして

アップルパイを作った。

「かな〜！！おはよ」

「おはよう、沙紀」

沙紀は今日も元気だ。

「なに？元気ないね。どうしたの？」

「うん、何でもない」

無理やり笑顔を作るがうまく笑えた自信はない。

「あ、ねえ。沙紀さ、毛利先輩って知ってる？」

「毛利先輩…？うん、わかるよ。小学校で委員会一緒だったことあるから」

「優しい？」

「うん、すごく優しい」

「可愛い？」

「うん、可愛いよ。特に笑顔が素敵！！」

分かりきったことを質問しまくった。

「…なに？かな、どうしたの？」

「沙紀、私って不細工？」

真剣に聞いてみる。

「はあ！????？」

「たしかに中の下かまだけど破滅的ではないよね!？」  
私の剣幕に沙紀もタジタジだ。

「真剣に聞いてんの？」

「うん、超マジ」

沙紀はため息をついて  
まじまじと私を見る。

「かなは美人ってより可愛いよ。細いし目は大きいし。鼻は少し低いけど、チャームポイントだと思う。お兄さんはイケメンだしね。」

「…ありがとう」

「なに？毛利先輩となんかあったの？」

沙紀はひそひそと聞いてくる。

「工藤先輩、毛利先輩が好きなんだ」

「え…？でもただの幼なじみなんですよ？」

「工藤先輩の片想いだもん」

私は泣きそうになりながら昨日の出来事を話す。

「おつかしいなあ…うちの部活の友だち、工藤先輩のファンで直接聞いたらしいけど  
ただの幼なじみだから好きだけどそういうんじゃないって言われた  
って…」

「本当？」

完全に信じたわけじゃないけど少し心が軽くなった。

「お！！アップルパイだ」

部活後に久しぶりに

おやつを振る舞った。

「パイかあ…内田先輩を思い出すな」  
先輩たちがかぶり付きながら雑談をする。

「内田先輩？」  
私はその人を知らない。

「瀬戸内先輩と同じ学年でマネージャーやってたんだよ。いつもレモンパイを差し入れてくれてたんだ」  
中道先輩が説明してくれた。

ふーん、じゃあサッカー部にとって…  
工藤先輩にとつても  
懐かしの味なんだ。

「瀬戸内!!」

突然呼ばれてどきつとした。

「はい!!」

「今週末の練習試合、特別なことは何もねーんだけど、お茶とかくらはいはこちらで用意したいんだ。コップとかいつもの倍用意してくれるか？」

キャプテンとマネージャーという立場が2人きりにしてくれた。

これだけ放課後の時間  
一緒にいれるんだ。

それだけで

幸せかもしれない。

週末だって  
試合で会える。

冬には合宿だってある。

せめて毛利先輩のいない時間は  
私のもにしたい…

練習試合当日。

いい天気だった。

試合が午後からだったので  
サッカー部思い出の味<sup>あじ</sup>レモンパイを作ってみた。

「コップをいつもの倍と、ゼツケンを二色と…」  
ブツブツ言いながら部室のドアを開けた。

「…あ…」

中の人物は  
意外な人だった。

「なんで兄貴がいんの!？」

「お前がこないだ週末練習試合だつて言つてたから工藤を激励に来たんだよ。上の空だったけどちゃんと受け答えをしてただろーが」  
え…全く覚えてない。

「あー！瀬戸内先輩！！」  
あとから来た先輩たちに兄貴は囲まれた。

自分の兄貴が後輩に慕われてる図をみるのも悪くない。  
そうよ。

”慕つてた先輩の妹” っていう立場が私にはあつた。  
すっかり忘れていた。

「瀬戸内先輩、高校ではサッカーやってねーんだつてな」  
私の横に来て工藤先輩は小声で言う。

「はい。サッカーを目的で高校選んだ訳じゃなかったんで。そして  
らあまり活発な部活動じゃなかったみたいですよ」

「そっか…うまいのに勿体無いな」  
私は勇気を出して聞いてみた。

「…工藤先輩は高校では続ける予定なんですか？」  
少し驚いた顔をして先輩は考えるような仕草を見せた。

「まだ2年だからな。先のことはなんとも」  
「もし。もしですよ？私が卒業して工藤先輩と同じ高校で先輩がサッカー続けてたらまたマネージャーとしてお世話になつてもいいですか？」

心臓はバクバク。  
震える指先を隠しながら先輩の顔を見た。  
クールな笑顔を見せて「YES」とも「NO」とも答えなかった。

練習試合が始まりギャラリイも増えてきた。

「工藤くん!!」

「きゃー!!」

ライバル多し

ギャラリーのほとんどは工藤先輩のファンの先輩たち。  
こんなにファンがいたんだ。

でも工藤先輩は

ギャラリーの声には無反応なくせに  
誰かを一生懸命探していた。

相手チームは完全に工藤先輩に遊ばれていた。

あんなに注意力散漫なのに  
相手にボールを渡さないなんて

凄い……

と私は変なところを感心していた。

前半戦終了。

「工藤く……!!遊んでねーで真面目にやれよ……!!」  
「わりいわりい」

遊んでた工藤先輩のおかげで0-0。  
中道先輩に怒られながらもまだギャラリーに目を向けていた。

「新一！！！！」

澄んだ声が響く。

「遅くなつてごめんね。今どんな感じ？」

フェンス越しに息を切らせた毛利先輩。

「：まだ0 - 0。おせーよ」

空気が変わった。

工藤先輩の空気が。

後半戦。

工藤先輩のロングシュートが直ぐに決まる。

前半戦で手を抜いていたのは

毛利先輩が来るまで体力を温存してだんだなあ…

敵わない。

叶わない。

私はその場に立ち竦んでしまった。

夕方色に空も校庭も染まる。

なんとなく部室に入りづらくてのんびり片付けをする。

練習試合はもちろんうちの圧勝。  
工藤先輩の活躍によるものだった。

「よっ…と」

サッカーボールの入った籠を用具入れに仕舞おうと引きずったとき  
勢いあまって籠のバランスが崩れて  
派手に倒してしまった。

「あ！！！！！」

なにやってんだか…

なんか

無性に泣きたいかも。

籠を起こして足元のボールを拾う。

「大丈夫？」

優しい声がした。

ボールを拾い笑顔で私の顔を覗く人物は

「毛利先輩…」

テキパキとボールを集め  
籠を運ぶのまで手伝ってくれた。

普通の出会いを果たしてたら

この人が工藤先輩の想い人じゃなかったら

大好きになっていただろうけれど

今の私はとても心が狭い。

「手伝ってくれて…ありがとうございました」

目を見るのが辛くて

深々と頭を下げた。

その勢いで

溜めてた涙が溢れた。

全速力で毛利先輩のもとを去る。

いつの間に

こんな嫌なやつになったんだろう。

毛利先輩に嫉妬して

素直になれない。

カバンの中のレモンパイ。

出しそびれちゃった。

甘酸っぱい

サッカードの味。

それを再現したところで  
先輩が振り向いてくれるわけじゃない。

そんなことは分かってる。

のろのろ着替えて  
部室に向かう。

きつとみんなもう帰宅してる。

誰に会うこともなく

鍵の確認だけして帰れたらいいな。

カチヤ

あれ、開いてる。

「お疲れさま」

中の人物は

「工藤先輩……」

「蘭が瀬戸内がなんか様子がいつもと違うみたいって言ってたから  
気になって……大丈夫か？」

それもきつと”工藤先輩が”私を気遣ったんじゃない。  
”毛利先輩が”私を気遣ったんだ。

工藤先輩の世界は  
彼女を中心に回っている。

「なんでもないです。すみません。」

笑顔を見せて話題を変えてみた。

「後半戦のロングシュート凄かったです。」

「さんきゅ」

クールな笑顔が返ってきた。以前は苦手だったこの笑顔。  
今は好き。

「前半戦、かなり遊んでましたよね」

「あ、バレてた？」

いたずらな笑顔も凄く好き。

「…毛利先輩を待ってたんですよ」

「バツ…なんじゃねーよ」

頬を染めて否定する先輩。

この顔は初めてみる。

「好きなんですか？毛利先輩のこと」

「あいつはただの幼なじみ！！そんなんじゃねーって」

口では否定してるけど

本心じゃないことはその表情からわかる。

「先輩…私 ……」

溢れ出した気持ちを

言葉に出すのは難しいけれど

散るのは一瞬なんだなって

産まれて初めてわかった。

無駄になっちゃったレモンパイ。

兄貴にあげようかな。

部室に1人

椅子に座って

この数週間を振り返る。

苦手だった工藤先輩を好きになって

毛利先輩に出会って嫉妬して

玉砕した。

好きにならなきゃよかったのに。気づかなきゃよかったのに。

バカだなあ…

「かな、帰るぞ」

後ろから兄貴が呼ぶ。

「いたんだ」

「まあな。工藤に振られたんだろ」

兄貴の顔も見ずに  
コクリと頷く。

「お前、今日レモンパイ焼いたろ？内田を思い出したよ」

「内田麻美さん？」

「あいつ、レモンパイ差し入れてたの。最初はマズイって言った  
工藤を見返すためだったんだけど」

最後は工藤を好きになってあいつに食べさせたくて差し入れてた」

「ふーん…」

サッカー部思い出の味にはそんな甘酸っぱい恋ばながあったのか。  
そして

私は内田先輩2号になっちゃったんだ。

「工藤は毛利さんにゾッコンだよ。無理だったんだよ、最初から  
兄貴が隣に腰かけた。

「わかってるよ」

「高望みだったな」

「わかってるよ！！しょうがないじゃん！！好きになっちゃったんだもん。」

今日だって告白するつもりなかったけど自然にでちゃったんだもん！！

抑えてんのも辛いし、自覚したらもつと辛いし…

好きにならなきゃよかった…工藤先輩、優しくしないで欲しかった…」

言い切るとまた涙が溢れた。

工藤先輩が優しくしなければこんなに辛い思いはしなかったのに。

毛利先輩がもつと嫌な人なら頑張れたのに。

「…嫌なやつだね。私。」

「失恋したらその人をボロクソに嫌いになったり責めたりすんのも手だろ」

そつと兄貴は私の頭を撫でながら言う。

「…嫌いになんてなってるじゃない。工藤先輩を好きになつたから部活楽しかったもん。いいんだ、もう。叫んだらすっきりしたし…毛利先輩も好きになれそうだもん。」

「そつか…帰るか」

暗くなつた道を2人で歩く。

明日は日曜日。

1日ゆっくりして

月曜日からはまた部活頑張らなきゃ。

「俺のトップシークレット教えてやる」

「え？」

突然兄貴が口を開いた。

「俺、去年試合の応援に来てた毛利さんに一目惚れしたんだ」

「ええええ！？」

思わず足を止めて大声をあげてしまった。

やばい、こ近所迷惑だったかな

「いち早く気づいたのが工藤で。アイツ俺に何て言ったと思う？」

「え…わかんない」

「瀬戸内先輩にはとてもよくして貰って感謝してもしきれませんが、でも、いくら先輩でも譲れません」ってハッキリ言っただよな」

「……………」

「後から聞いた話。毛利さんに近づいた男って工藤に返り討ちにされてんの。」

俺、工藤に慕われててよかった」

そうなんだ。

工藤先輩やっぱり好きなんじゃん。

って言うか

工藤先輩って…

「かつ……………こいいゝ羨ましいゝ毛利先輩!!!!!!」

「……………は？」

今、瀬戸内かな16歳。

完全に工藤先輩のファンになりました。

どうか

どうか

工藤先輩の恋が叶いますように。

「お前…さっき失恋して泣いてなかったか？」

「いいの！！私は好きな人の幸せを願える人になる！！」

キラキラした毎日くれた工藤先輩を嫌うなんてできないし。

あんなクールな工藤先輩を惚れさせちゃう毛利先輩も（まだ辛いけど）きつと好きになれる。

この恋に…気持ちに気づけてよかった。

痛くて辛くて…でも楽しい日々を送れてよかった。

工藤先輩も

どうにも溢れだす気持ちに

痛みを感じるのだろうか。

どうかその痛みをしのごく幸福を彼に

…

1年後

工藤先輩と毛利先輩は帝丹高校合格したと風の噂で聞いた。

私も死ぬ気で追いかけて合格しまた同じ学校へ通うこととなった。

私が入学して間もなく工藤先輩はサッカー部を辞めその後休学し、ほとんど顔を合わせることもなく。

ただひたすら待ち続ける毛利先輩を見る度に

「やはりこの人には敵わない」と思い知らされた。

冬が過ぎ暖かくなり始めたころ工藤先輩はなんの前触れもなく帰ってきた。

久しぶりに見た工藤先輩に高鳴る心臓を抑えるのに私は必死だった。

そして

先輩たちが付き合い始めた、という噂を耳にして

また少し胸が痛くなった。

まだ実は好きだったのかな。

私もしつこいな。

そんなある日、

たまたま職員室前でバツタリ工藤先輩と遭遇。

「よお」

相変わらず素敵な笑顔。

「ながーいながーい春でしたね 工藤先輩!!」

それだけ告げてその場から立ち去った。

私の恋の完全に終わった瞬間。

それ以来

先輩を想って胸が痛むことはなくなった。

(後書き)

冒頭のかなのモノローグは

失恋後、部室に座り込むかなのモノです。

”先輩、大好きでした”のフレーズは大好きな少女マンガから頂きました。

中学生高校生って年上に憧れますよね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2053z/>

---

恋の痛み

2011年12月7日14時45分発行